枯野行く

森岡　正作

朱欒下げ大先生に診てもらふ

バンダナの老人狩の掟説く

狼を信じつづけて男老ゆ

月蝕や狐の提灯過りをり

枯野行く見えざるものに戦きて

蛸踊り竹輪笛吹くおでん鍋

山頂や鈴鳴るやうに寒昴

新年の

登四郎先生の句集『羽化』を読んで、平成十二年の元日に詠まれた句に目を止めた。先生はきっと起床してお風呂に入って後に朝食をとるのが慣いだったのであろう。その起床からお風呂までに詠まれた数句の中の七句を挙げてみよう。朝の最初に〈**初明り浴び立つ我や九十歳**〉次に〈**清らなる一月はわが生れ月**〉で〈**初明りの中なる己れ確かにゐて**〉〈**元旦の穏やかな日を誰も褒む**〉〈**新年のまづ仰ぐもの庭の松**〉〈**賜りしこの一年をひしと抱く**〉〈**初湯出てすこし身軽き立ち居かも**〉などがある。

先生は一月五日生まれという。初めの三句からは起き抜けの思考で、五日後には大きな区切りの九十歳になるという手応えを持ち、それからいつものように庭へ出たのであろう。そして淡々とした思いで、穏やかに元旦を迎えたことを寿ぎ、昨日と同じようにご自分の分身とも思える庭の松に「また一年よろしく」とでも声をかけ、朝風呂を気持ち良く終えたのである。